

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16752

研究課題名(和文)カクチケル語及びマヤ諸語の(分裂)能格性の形態統語論的研究

研究課題名(英文)A morphosyntactic study of (split) ergativity in Kaqchikel and Mayan languages

研究代表者

今西 祐介 (IMANISHI, Yusuke)

関西学院大学・総合政策学部・助教

研究者番号：80734011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は主にカクチケル語をはじめとするマヤ諸語の比較統語研究を行った。その中でも中心的に取り組んだのは、マヤ諸語の能格性、特に分裂能格性と名詞化の関連についての研究である。具体的には、名詞化節内の外項の有無と、対格型配列における一致形態素と文法関係の対応様式が相関していることを明らかにした。本研究は、カクチケル語及びマヤ諸語の分裂能格現象を正確に予測・説明できる形態・統語理論モデルを提案することにより、人間言語の能格性の本質の解明に寄与したと言える。

研究成果の概要(英文)：This research project has investigated several Mayan languages such as Kaqchikel, from the perspective of comparative syntax. Among the various topics investigated in this project, I have focused primarily on the ergative properties of these languages and particularly addressed the correlation between split ergativity and nominalization. I have demonstrated that the presence or absence of an external argument within a nominalized clause correlates with the type of an alignment between agreement morphemes and grammatical relations. Based on this finding among others, the project has proposed a new morphosyntactic analysis of split ergativity in Kaqchikel and other Mayan languages, thereby providing a better understanding of the nature of ergativity in human language.

研究分野：言語学

キーワード：分裂能格性 名詞化 マヤ諸語(カクチケル語、イシル語) 喜界語 統語論 形態論 比較統語論

1. 研究開始当初の背景

人間言語において、文法関係を明示する重要な役割を担っているのが、(形態)格や一致形態素である。世界の言語を見渡すと、格・一致形態素と文法関係の対応様式(=配列)は決して一様ではなく、幾つかの変異があることが先行研究により指摘されてきた(Comrie 1978 他)。その中でも本研究が扱う能格型の配列(以下詳述)はその複雑さゆえに格配列研究の中心的課題の一つである。

これまで研究代表者は一貫して、自然言語の文生成メカニズムの解明に従事してきた。その中でも集中的に取り組んできたのは、マヤ語族の一つであり、中米グアテマラ共和国で話されているカクチケル語の能格性及び分裂能格性である。カクチケル語はユネスコの2010年の調査により、存続の危機に瀕する可能性が高い言語に指定されている。

本研究が中心的に扱うカクチケル語を含めたマヤ諸語は能格言語であり主要部有標型言語である。能格言語の特徴を具体的に述べると、自動詞文の主語と他動詞文の目的語が同じ形(=絶対格人称標識、あるいはマヤ言語学では人称B標識と呼ばれる)を取り、他動詞文の主語だけがそれとは異なった形(=能格人称標識、あるいはマヤ言語学では人称A標識と呼ばれる)を取る(=能格性)。そして、これらの人称標識が文中の述語に表される(=主要部有標型)。それに対し、主格・対格型の日本語や他の多くの言語では、自動詞文と他動詞文の主語が同じ形を取り、他動詞文の目的語だけが異なった形を取る(=対格性)。

しかし、多くの能格言語は一貫してこのような形の能格性を示すわけではないことが、Silverstein (1976) や Dixon(1994) 等で報告されている。特に、分裂能格性と呼ばれる現象が数多くの能格言語で観察されている。分裂能格性とは、一つの言語が能格性と対格性(あるいは他の格配列型)の両方の特徴を兼ね備えている状態を指し、以下では、特に、分裂能格性において現れる対格性のことを指す。そして、 Chol語やカンホバル語を含む多くのマヤ諸語においても、特定の時制・相で分裂能格性が見られるということが、Larsen and Norman (1979)、England(1983)、Coon (2010, 2013) 等の研究によって報告されている。これらの言語では、完結相においては能格性を示すのに対し、進行相や未完結相においては対格性を示し、自動詞文と他動詞文の主語が能格人称標識を用い、他動詞文の目的語だけが絶対格人称標識を用いる。カクチケル語の場合、前掲の Larsen、Norman の先行研究等では、上述したマヤ諸語のような分裂能格性が見られないと分析され、それ故にあまり注目されてこなかった。

研究代表者は過去の研究(Imanishi 2014)において、カクチケル語が人称標識と文法関係の対応様式において、他のマヤ諸語とは大きく異なる分裂能格性を示すことを明らかにした(以下詳述)。しかしながら、近年研究が進んでいるマヤ諸語(Chol語やカンホバル語等)に比べると、カクチケル語に言及する研究は幾つか存在するものの、当該言語そのものに対する理論的分析は数少ないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(分裂)能格現象を正確に予測・説明できる形態・統語理論モデルを構築することにより、自然言語に備わる(分裂)能格性という文法メカニズムを解明することである。この目的を達成するために、文献調査とカクチケル語母語話者とのフィールドワークを駆使する。そして、今まで体系的に研究されてこなかった当該言語を他のマヤ諸語及び能格言語と比較することで、従来の能格研究と比較言語研究に新たな視座を加えることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究で研究代表者は、上述の研究目的を達成するために、カクチケル語に見られる特異な分裂能格性の特性と分布を詳細に記述し、それらの分析を行った。その際に、カクチケル語を他のマヤ諸語及び能格言語と比較することで、カクチケル語のみならず多くの能格言語で見受けられる分裂能格性にまつわる問題を体系的に説明できる形態・統語理論を提示した。

具体的には、1年目と2年目は、これまでのフィールドワーク調査で蓄積されたカクチケル語のデータの整理・分析と他の能格言語の文献調査を行った。また、比較統語的観点からこれらの言語の理論的分析も行った。3年目は、1~2年目の研究で明らかになった分析の問題点を修正するために、新たなデータの収集期間と位置づけた。そこで、過去に調査経験のあるグアテマラ共和国パツン地区において、カクチケル語母語話者を対象に言語学的手法に基づくフィールドワーク調査を行った(2018年2月)。その際、米国メリーランド大学言語科学研究所グアテマラフィールドステーション所長及び同研究所研究員である Pedro Mateo Pedro 氏に協力頂いた。また、Mateo Pedro 氏からは本研究の進捗状況に関しても有益な助言を頂いた。グアテマラでのフィールドワーク調査により、様々なタイプの言語データを収集することができ、多角的視点からの言語現象の分析が可能になった。

さらに、本研究は、奄美・喜界島で話されて

いる喜界語の現地調査も行った(2016年3月、12月、2017年11月)。当初の研究計画では想定していなかったことではあるが、能格性の形態・統語的特性を理解する上で重要であると判断し、過去に調査経験がある当該言語の研究にも着手した。

その他、2015年6月に米国マサチューセッツ工科大学言語・哲学科を訪れ、研究者と議論を交わし、有益な助言を得た。

4. 研究成果

(1) 分裂能格性と名詞化

研究代表者はこれまでに、カクチケル語が人称標識と文法関係の対応様式において、「1. 研究開始当初の背景」で紹介したチョル語やカンホバル語とは大きく異なる分裂能格性を示すことを明らかにしてきた。具体的には、カクチケル語では、進行相において対格性が見られ、自動詞文と他動詞文の主語が絶対格人称標識で標示され、他動詞文の目的語だけが能格人称標識で標示されることを明らかにした。以上の、カクチケル語とチョル語・カンホバル語の対格型をまとめたものが表1、2である。

表1：カクチケル語タイプの対格型

	主語	目的語
自動詞文	絶対格人称標識	-
他動詞文	絶対格人称標識	能格人称標識

表2：チョル語・カンホバル語タイプの対格型

	主語	目的語
自動詞文	能格人称標識	-
他動詞文	能格人称標識	絶対格人称標識

カクチケル語もチョル語・カンホバル語も未完結相において対格型を示すという点においては共通しているが、上述したように両タイプの対格型は人称標識と文法関係の対応様式という点においては鏡像(mirror-image)関係にある。このような対照的な対応様式がなぜ同じマヤ語族内で見られるのか、またマヤ語族の中でも異なる語派に属するチョル語とカンホバル語がなぜ同一の対格型を示すのかは重要な課題であった。そこで、本研究はカクチケル語の対格性が生じる環境についての形態・統語的調査を行った。また、自然言語の能格性をより理解するために、カクチケル語と他のマヤ諸語及び能格言語との比較研究を行った。

マヤ諸語の最近の研究では、チョル語・カンホバル語の対格型の文には共通した構造が存在することが分かっている。Coon (2013)は、バスク語の研究成果を基に、チョル語・カンホバル語の対格型を持つ未完結相文は、相述語と名詞化動詞から成る複文構造(biclausal structure)を持つと提案した。それ以前にも、Larsen and Norman (1979), Bricker (1981), Larsen (1981)が幾つかのマヤ諸語の対格型に対して同様の分析を提案していたが、Coonはより詳細な複文構造を提示した。

本研究はこれまでのバスク語及びマヤ諸語の能格性研究を発展させ、表1のような対格型を持つカクチケル語の文も複文構造を持つと提案した。表1と表2のような違いを説明するために、本研究は先述の複文構造に生じる名詞化の統語的特性を中心に研究を行った。その結果、名詞化節内の外項の有無と、対格型配列における一致形態素と文法関係の対応が相関していることを明らかにした。具体的には、カクチケル語タイプの対格型を示す言語の名詞化節内には外項が生じることができないのに対して、チョル語・カンホバル語タイプの対格型を持つ言語の名詞化節内には外項が生じ得ることが分かった。本研究は、これらの差異に関する理論的分析を行うことで、なぜ表1、表2のような違いが生じるのかを説明した。

(2) 異なるタイプの分裂能格性：カクチケル語及びイシル語の事例

カクチケル語の分裂能格性において、表1とは対照的に他動詞文の目的語が能格人称標識を取らず無標示である事例が報告されていた(Garcia Matzar 2007)。本研究は、なぜこのような例外的事例が可能であるのかを検証した。その際、名詞化される動詞に付く接尾辞(-oj)に焦点を当てることにより、この接尾辞が能格人称標識の分布に及ぼす影響を考察した。この接尾辞は、カクチケル語と同じキチェ語群に属するツトゥヒル語の分裂能格性を示す文の動詞にも現れることがDayley (1985)で確認されている。この場合、カクチケル語と同様に、他動詞文の目的語が例外的に能格人称標識を取らないということが指摘されている。

本研究は、-ojを伴った分裂能格性の問題に取り組むために、今までに蓄積されてきた比較統語論研究の成果を取り入れることにより、当該現象が名詞抱合(noun incorporation)を伴っていることを示した。名詞抱合はモホーク語等の言語に見られ、目的語等の文要素が動詞の一部に組み込まれる現象のことを指す。この現象は、Mithun (1984)やBaker (1988)等によって研究されている重要な言語現象の一つであり、その

メカニズムに関する理解は比較的進んでいると言える。特に、Baker の提案は、名詞抱合された名詞は格を必要としないというものである。本研究では、名詞抱合分析を提案することにより、なぜ-*oj* を伴った分裂能格性において能格人称標識が現れないのかという問いに対して理論的（特に格理論の観点から）説明を与えることが可能になった。

さらに、本研究は他のマヤ諸語、特にイシル語に見られる特異な分裂能格性の分析も行った。Ayres (1983, 1991) や Yasugi (2012) により、イシル語や先述のツトゥヒル語等では、自動詞文において、手段や道具を表す句が文頭に置かれた場合、主語が例外的に能格人称標識を取るということが報告されていた。本研究は当該現象に関する文献調査と母語話者から提供された幾つかのデータの分析を進めることにより、非能格動詞文だけでなく非対格動詞文においても能格人称標識が現れることを明らかにした。この事実を基に、本研究は当該現象が能格付与様式に関する現行理論に新たな視座を与えることを示した。特に、本現象は内在格分析 (Woolford 1997, 2006 他) にとって重要な反例になることを指摘し、依存格分析 (Marantz 1991, Baker 2014) を強く支持することを主張した。

(3) 喜界語

予備調査段階ではあるが、本研究は分裂能格性の観点からほとんど分析されることがなかった喜界語の格配列の特性の研究も行った。特に、当該言語が活格型配列を持つかを検証した。活格型配列は、動詞の意味的特性に応じて、自動詞文主語が他動詞文主語と同じ格標示を受ける場合 (= 対格性) と他動詞文目的語と同じ格標示を受ける場合 (= 能格性) があることを指す。

予備調査の結果、喜界語のゼロ格の分布が活格型配列に類似していることが明らかになった。特に、自動詞の状態性が強いほどその主語は他動詞文目的語 (= ゼロ格) と同じ格標示を許され、動作性が強いほどその主語は他動詞文主語 (= *-ŋa/nu*) と同じ格を持つ傾向にあることが分かった。とはいえ、今後当該言語の自動詞の意味分類を体系的に行い、それらの主語の格標示様式を精査する必要がある。また、活格型配列を持つ他の言語との比較を通して、通言語的に当該配列を誘発する傾向にある動詞の意味的特性を検証する必要がある。

以上のように、本研究は、カクチケル語及びマヤ諸語の分裂能格現象を正確に予測・説明できる形態・統語理論モデルを提案することにより、人間言語の能格性の本質の解明に寄与したと言える。また、マヤ諸語だけでなく喜界語の分裂能格現象の今後の研究につな

がる重要な礎を築いたとも言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

① Yusuke Imanishi, “The Clause-Mate Condition on Resumption: Evidence from Kaqchikel,” *Studia Linguistica*, 2017 (掲載決定済). [査読有]

② Yusuke Imanishi, “Parameterizing Split Ergativity in Mayan,” *Natural Language and Linguistic Theory*, 2017 (掲載決定済). [査読有]

③ Yusuke Imanishi, “A Derivational Account of Dependent Ergative Case: The Instrumental Voice in Ixil,” *Proceedings of the 52nd Annual Meeting of Chicago Linguistic Society*, pp. 267-281, 2017. [査読有]

④ Yusuke Imanishi, “Review of Agreement and Its Failures,” *English Linguistics* 34 Vol 1, pp. 93-104, 2017. [査読有、徳憑]

⑤ Yusuke Imanishi, “Derived Ergative in Ixil,” *Proceedings of the 34th West Coast Conference on Formal Linguistics*, pp. 259-266, 2017. [査読有]

⑥ Masaru Honda and Yusuke Imanishi, “The Syntax of Kikai: A Preliminary Study,” *Journal of Policy Studies* 50, pp. 61-68, 2015. [査読無]

⑦ Yusuke Imanishi, “When Ergative is Default: A View from Mayan,” *Proceedings of the 32nd West Coast Conference on Formal Linguistics*, pp. 238-247, 2015. [査読有]

[学会発表] (計 9 件)

① Yusuke Imanishi, “Predicting (Im)possible Languages: Nominalization and Clause-Type in Mayan and Beyond,” *Morphology & Lexicon Forum* (甲南大学)、2017. [招待講演]

② Yusuke Imanishi, 「消えゆく言語を追って：理論言語学とフィールドワークの融合」、愛知大学教養セミナー (愛知大学)、2017. [招待講演]

③ Yusuke Imanishi, “Parameterizing Split Ergativity in Mayan: Implications

for Unaccusativity in Nominalization,”
神戸大学言語学研究室コロキアム（神戸大
学），2016. [招待講演]

④ Yusuke Imanishi, “Be Careful Where
Ergative Looks Default: A Phase-Based
Account of (Split) Ergativity in Mayan and
Beyond,” 慶応言語学コロキアム（慶應義塾
大学），2016. [招待講演]

⑤ Yusuke Imanishi, “A Derivational
Account of Dependent Ergative Case: The
Instrumental Voice in Ixil,” *The 52nd
Annual Meeting of Chicago Linguistic
Society*, The University of
Chicago, 2016. [査読有]

⑥ Yusuke Imanishi, “Derivational
Account of Dependent Ergative Case: The
Instrumental Voice in Ixil,” *The 34th
West Coast Conference on Formal
Linguistics*, The University of Utah, 2016.
[査読有]

[図書] (計 2 件)

① Yusuke Imanishi 他, “(Pseudo) Noun
Incorporation and Its Kin,” *A Pesky Set:
Papers for David Pesetsky*, MIT Working
Papers in Linguistics, pp. 427-436, 2017.
[査読有]

② Yusuke Imanishi 他, “A Note on the
Clausal Typing Hypothesis: A View from
Kaqchikel,” 『言葉のしんそう (深層・真相)』、
英宝社、pp. 295-306, 2015. [査読無]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今西 祐介 (IMANISHI, Yusuke)

関西学院大学・総合政策学部・助教

研究者番号：80734011